

お隣のお姉ちゃんな
女子大生は
俺のいいなりです

小説 舞麗辞
挿絵 しまちよ

立ち読み版



プロローグ 俺、姉ちゃんのためならなんだってする！

第一話 頑張ってカレシのふりだってするし

第二話 ドキドキしながら一緒にラブホだって行くし

第三話 姉ちゃんのこと脅迫だってするし

第四話 大好きだから本気で告るし！

第五話 いいなりにだってなるし

エピローグ おかげで姉ちゃんは俺のいいなりです

登場人物紹介

Characters



くましろほのか 神代穂花

隣の家に住む女子大生。おっとりしたしゃべり方で、体つきは巨乳でムチムチ。女子力高めなお姉さん。



うち だしょうた 内田翔太

数年ぶりに会った穂花の変わりように驚きを隠せない少年。

「でもそっか、翔ちゃんもやつぱりおっぱいと興味あるんだあ。男の人ってみいんな胸見てくるよね。だからあんまり大きすぎるの、イヤなんだけどなあ」

あたかも無用の長物と言いたげに、穂花は二つの膨らみを自らむにむにと弄ぶ。貧乳でお困りの女性諸氏が聞いたら藁人形と五寸釘で呪い殺されても文句も言えないところだ。そうやってしばしの間自分の巨乳を揺らしていた穂花だったが、

「……でもそれじゃあ、次はブラジャーの外し方、教えてあげよつかあ？」

やがて再び顔を上げると、こちらの目を見てまたまたとんでもないことを提案してきた。「えっ、ブラっ……っ……じっ、自分が何言ってるのかわかってんのかよっ!!」

姉のとんでもない申し出を前に、翔太の声が裏返る。

「ホック外すところまで、だよお？ だって男の子って最初るとき苦労するんだって。だから後々翔ちゃんが困らないように、ねっ」

そう提案する穂花の表情は随分と楽しげだ。

穂花の態度はまるで子供にお遊戯を教える保母みたいに翔太には見えた。

(俺のこと男って目で見てたら、こんなことやらせないよな、ふっ……)

きくと穂花はこちらをまだまだ子供とタカを括って、罪のないごっこ遊びに興じようとしてるに違いない。

(なんだよ、どこまでも子供扱いしてっ……)

そう思うとカチンときて、姉の鼻を明かしたい衝動に駆られた。

「そつ、それくらい楽勝だろ」

言うが早い少年は再び穂花の脇に手を差し入れ腕を背中へと回す。今度は両腕とも、それはドラマか何かのベッドシーンの見よう見まねだったのだが、

「わっ、いきなりもおっ……もしかして本当にこういう経験、あるのお？」

大胆な少年の行動に姉はびっくりした様子で壮大な勘違いをする。

しかし当然すべてが初体験な当の翔太はといえば。

（うわっ……これ、めちゃくちゃ胸が当たるっ……ぼっ、ぼよぼよっ……!!）

むにいいい……!!

胸囲を測るような体勢のため、二人の胸板の間でたわわな柔乳がひしゃげる。互いの服を挟んでなお、その感触は形状記憶つきのプリンみたいに柔らかく、同時に弾力豊かだった。

（あ、あんまこうしてたら不自然だよな……）

気持ちとしてはホテルの休憩時間が終わるまでずつとこうしていたくらいだったが、いつまでも固まっていると姉に胸の感触を意識しているのがばれてしまう。

そこで翔太はシャツ越しに、背中を撫でるようにして探りを入れてみた。すると背骨のライン上まで来たところで、明らかに布とは異なる硬いホックの感触が指に触れた。

「コレだろ？　こんなのあつという間に……って……あ、れ……？」

標的を捉えた少年は二度三度とホックを外そうと試みるものの、金具はしっかり手と手

を結んで外れる素振りも見せない。

「大丈夫？ 一回左右を重ねるようにして、ホックを緩めて外すんだよ？」

悪戦苦闘の少年を見兼ねた姉が助言してきた。

「そんなことは言われなくたって……あつ！」

などと言いつつ彼女のアドバイスに従い指先を動かしてみると、それまでの苦戦が嘘だったようにいともたやすくホックが外れた。

するとその瞬間。

ブルンッ！

穂花のシャツの胸元が不意に弾けるような膨張に見舞われた。それまで下着で押さえ込んでいたのが一気に解放されたらしい。瞬く間にシャツの表面が内側からの圧力でパツンパツンに張り詰めた。

(すっ、すごい……あれでもまだ押さえつけてたんだ……)

シャツの中で解放された穂花の胸はまるで小さなビニール袋に熟れ頃のメロンを二つ強引に詰め込んだかのように、乳球が互いを押しつけるように並んでいる。爆乳と呼んで差し支えないそのボリュームに少年は思わずゴクリと唾を呑む。

「ほら簡単でしょ？」

しかしこちらの興奮に気づく様子もない穂花は、見事ホックを外すことに成功した翔太に對しまるで工作が上手にできた幼稚園児にするみたいに褒めてきた。

はしたなく興奮しきりな自分に気づかれずに安堵した反面、事ここに至っての子供扱いにますますカチンとくる。

「えっ、エラソーにっ……だっ、だいたい姉ちゃんの方こそ経験あるのかよ……誰かと、そのっ……こういうこと」

興奮を気どられまいと思わず口を突いた質問は、この前彼女と再会してからずっと聞いてみたかったことだった。

（けど姉ちゃん、こんな調子じゃ案外男なんて縁がなかったっばいよな——）
そんな期待にも似た予測を頭に思い浮かべていると。

「えっ……そ、そりゃあわたしだっけ大学生だもん。それくらい……あるよお？」
しかし返ってきた答えは翔太の予想を裏切るものだった。

「え？」

姉の発言に一瞬固まってしまふ。

「あ、そう……そう、だよな……」

（うそ……姉ちゃん、もう経験あるのかよ——!?!）

口からこぼれる言葉と思考が一致しない。

彼女くらいの歳で、ましてやこのルックスで。イマドキ経験がないという方がおかしいのだということくらい翔太だっけ知ってる。

しかし頭でわかるのとは心で納得するのとはまったくの別だ。

(姉ちゃんが……姉ちゃんがもう誰かとエロいことしてた——!!)

そう思った瞬間、先ほど観たAVの映像がフラッシュバックする。知らない男と裸で抱きあつて喜悅の笑みを浮かべる姉の顔——それは現実のものだったのだ。

(そっか……そうだよなあ……だからこんなところに平気で誘えるんだ……)

ストーカーへのアピールと言いつつも、子供扱いされると感じながらも。それでも頭のどこかでは「こんな場所に一緒に入ろうだなんて、もしかしたら姉ちゃんも俺のこと——」そんな淡い気持ちを抱いていたのに。そんな自分の思い上がりが猛烈に恥ずかしくなってくる。

「あれ……もしかしてヤキモチ、焼いちゃったあ？」

無言で固まる翔太を見て、姉は目を細めてクスクスと笑っている。

「そんなこと……ない、けど……」

凶星を指された少年は口で咄嗟に否定の言葉を紡ぎながらも、

(やっぱり……俺のこと、からかって遊んでただけなんだ)

自分の純情を弄ばれた——そう思うと、これまで彼女に感じていた初恋みたいな純真な気持ちバラバラに砕け散り、その代わりに目の前の異性に対する劣情が一気に膨れ上がった。

(でも、だったら……こういうこと、慣れてるんだったら……俺のこと、ガキだと思ってるんだったら——!!)

「そつ、それじゃ——これくらい平気だよなっ!!」

ぐにゅいいっ!!

湧き上がる獣欲を抑えきれなくなった翔太は、シャツの上から姉の胸をむんずと鷺掴みにする。

「ひゃうっ!!」

五指が柔肉にズブズブとめり込むとそれまでお姉さんぶっていた穂花が一転、甲高い悲鳴を漏らした。

(うわっすごく柔らかいっ……指っ、て言うか掌っ……手首まで飲み込まれそう……!!)

生まれて初めて味わう女性の乳房の感触に、指先は喜悦に痺れ無意識のうちに指がぐにぐにと蠢いて柔肉を弄ぶ。

「ちよつと翔ちゃんっ!! いきなりなにす……ンきやはっ!!」

穂花の抗議の声がまたも仔犬じみた喘ぎに取って代わった。翔太がもう一方の手でも姉の豊胸を鷺掴んだのだ。

「だつてこれくらい慣れっこなんだろ? なら……今日のお礼代わりに、いいじゃん!!」
ぐいっ!!

苛立ちと興奮に任せてシャツを捲り上げる。シャツを剥かれた反動で、胸がぶるんつと力強く跳ね踊った。

「そつ、そんなっ……ぬっ、脱がせちゃだっ!!」

どうにかシャツを元に戻そうと暴れる姉の腕を、片手で束ね押さえつける。小学生の頃はいくら本気で暴れても簡単に押さえ込まれていたのに。当然ながら今や体力で姉を圧倒していることを改めて自覚した翔太は、目の前の姉が一気に小さく——可愛らしく——見えた。

「胸しかしないから、いいだろ？ だいたい俺が彼氏役やってやらなかったら、さっきのヤツにこれ以上のこと、されたかもしれないんだぞ？」

「そつ、それはそうかもしれないけど……」

翔太の言葉に穂花は口ごもる。それから十秒近く、姉は困ったように視線を落としていたが、

「…………おっぱい、ただだよお？」

やがて恥ずかしそうに上目遣いでこちらを見ると、同時にフツと腕の力を抜いた。

「わっ、わかってるって……!!」

言うが早い少年は無抵抗になつた穂花の腕をバンザイさせ、大人が幼子を着替えさせるときみたいにシャツを脱がせる。一瞬綺麗に処理された艶やかな腋が覗いて翔太はゴクリと喉を鳴らしたが、今は眼前の双丘を暴くのが先だ。

（おっぱいっ……姉ちゃんのおっぱい見れるっ……!!）

劣情に急ぎ立てられながら、胸の膨らみに覆いかぶさるブラのカップをグッと指で押し上げると、既にホックの外されていたブラジャーはたやすく乳釣鐘から剥がれ落ちた。

ぷりゅんっ!!

「すっ、すげえっ……!!」

乳房がまるび出た瞬間、翔太は思わず掠れた声で呟いていた。だって目の前に現れたのはまるで巨大なあんまんみたいなミルク色の肉の塊だったのだ。

(なっ、生乳なまぢちっ！ コレが生で見える女子の、姉ちゃんのおっぱいっ!!)

エロ漫画もエロ画像も動画だって簡単に手に入れられるネット世代の翔太だが、肉眼で見える成熟した女子の裸はそれらとは一線を画す生々しさだった。

無論先ほど観たAVとのモニタージュともまるで違う。生々しいが、決して下品でないのだ。

「そっ、そんなジロジロ見ちゃだ…恥ずかしいよお……」

恥じらいに震える姉の胸は仰向きの姿勢にもかかわらず、まったく型崩れを起こしていなかった。ぷるぷると小刻みに踊るその様はまるで皿に載せたプリンのようなようだ。

熟れ頃の果実みたいにパンパンに膨れた双丘は、裾野から峰までが本当に美しい。乳輪もその巨乳さとの対比が絶妙と思える大きさで、淡い紅色に色づいたそこは他の乳肌部分よりやややぶつくりと充血し膨れ上がっているように見えた。

そしてそんな乳輪の中心では、小豆を半分にしたくらいの大きさの突起が生意気そうにピョコンと天を向いている。

「やだっ翔ちゃん…すぐく、エッチな目、してるよお……?」

剥き身の乳釣鐘を食い入るようにつめる翔太に、穂花が堪らず恥ずかしそうに眉を八の字に寄せ口元を歪めた。同時に両手で胸を隠そうとしたので翔太がそれを制する。

「なんで隠すの？　すごい綺麗だよ、姉ちゃんのおっぱい……もつと近くで見せてよ」

言いながら翔太は四つん這いになって目の前の肉果実へ顔を寄せると、双球の間へダイブするように顔を埋め、そのまま両手で左右の乳房を寄せた。

むにゅううううう……!!

「ひゃうんっ!!」

頭上で可愛らしい悲鳴があがる。両頬に押し付けた熱したマシユマロのような甘い感触に、掌も顔面も蕩けてしまいそうだ。

(うわあっ……なにこれっ、すごく気持ちいいっ……!!)

少年は夢中で乳肉を手繰り寄せると、首を左右に小さく揺さぶりそのプリンのような優しい弾力を思うままに楽しむ。

「んあっ、だ……め……、そんな乱暴にしちゃあっ……」

胸を弄っているうちに、姉の息が徐々に上がってきた。それで乱れた呼吸による双丘の震えも、少年の興奮をよりかき立てる。一瞬でもこの胸を離したくなくて、翔太はがむしやらの谷間を泳ぐ。

(息できないっ……けどっ、気持ちいいから……いいっ!!)

柔らかな温もりの中、汗の匂いと甘い女の子の匂いの混ざりあつた檸檬れもんみたいに甘酸っ

ばい芳香に包まれていると、次第に頭の芯が酩酊したようにポーッとしてくる。

しかし柔乳に溺れほとんど酸欠状態になりながらも、翔太は決して顔を離そうとは思わなかった。

(こんなことされて、姉ちゃんも気持ちよくなつてきちゃつてたりして……)

乳房に挟まれたまま、少年はふと姉の様子に気になって上目遣いで彼女の顔を覗き見る。しかし翔太の希望的観測に反し、これだけのことをされていながら穂花は口元に微笑を絶やしていない。それどころか、彼女の表情はまるでマセた子どものイタズラにやれやれと苦笑しているかのように見えた。

(なんだよ、ここまでしてんのにまだ俺のこと子供扱いかよっ……やつば姉ちゃん、このくらいのこと慣れっこなのかな……くそっ！)

そう思うと、胸の中で先ほどの焼け付くような黒い衝動が再度湧き上がり、まだ誰にもされたことがないほど——姉をめちやくちやにしてやりたくなくなった。

「乱暴つてのは——こういうのだろッ!!」

ぐにっ! ぐにいいいっ!!

乳谷間から顔を上げた翔太は陵辱もののAVを真似て、穂花の胸を暴力的にこね回す。

「ひゃんうっ!? やっ、痛いよっ!!」

姉の乳房は片手では収まりきらないほどのボリュームで、翔太はそれを強引にかき集めるみたいにくにくにと何度も乱暴に揉みしだいた。

「お願いっ、そんな痛くしちゃだつめえっ……!!」

姉の悲鳴にも似た懇願に一瞬手を止めた翔太だが、そうしたことであることに気づく。

(姉ちゃん……乳首、勃起させてる——)

そこは最初に見たときと比べて明らかに充血して先を尖らせ、淡い桜色から鮮やかな紅色へと化したなく色づいていた。

「……姉ちゃん、これなんだよ?」

ピンッ!

試しに硬くなった乳芽をデコピンの要領で弾いてみると、

「ひんっ!」

鋭い音と甲高い悲鳴が連弾のようにホテルの天井に響いた。

「痛いくせに乳首勃たせてるのかよ……本当はこういうの、好きなんだろ?」

ピシィッ!!

「きゃはんっ!? ちがつ、そんなんじゃ……あひゃんっ!!」

姉の抗議の声も指がヒットするたび細切れになり、はしたない喘ぎに取って代わる。

(姉ちゃんっ……なんてエロい声出すんだよ……)

胸を弄っているだけなのに。先ほどのAVに出ていた女優と比べても引けを取らないほどの激しい牝鳴き声をあげる年上の幼馴染に、翔太は息を呑む。

声だけじゃない。姉の表情はまるで顔中の筋肉が緩んでしまったみたい弛緩して、半

開きの口元からは喘ぎ声ばかりか透明な唾液さえ溢れ出ていた。

「すごい……姉ちゃんの胸、どんどん勃起してきてるよ……」

翔太の言葉通り、彼女の乳頭は一撃浴びるごとにムクムクと目に見えて膨張していくのがわかった。膨張は先端のみにとどまらず、五百円玉ほどの大きさの乳輪部分も、ホットプレートの上で焼かれるパンケーキみたいにぷっくりと膨れてきている。

「やっ、それ以上はダメ、本当にダメ……だよおっ……!!」

ピンッ、ピンッ!

ゼリービーンズのような唇をわななかせながら制止する姉にも構わず、その反応の可愛らしさといやらしさに翔太は何度もデコピンで敏感突起を弾きまくった。

(もっとな……もつと姉ちゃんにエロいことしたい、姉ちゃん俺のものにしたい……!!)

やがて指で弄るだけで飽き足らなくなった翔太は一方でデコピン責めを継続しつつ、もう一方の乳山に顔を埋め勃起乳首に舌を絡める。

れるおおお……舌先で乳頭を転がしてみるとそこは硬めのグミみたいな感触で、気のせいかもしれないが甘いミルクの香りがした。

(うわあ……姉ちゃんの胸、すごく甘いっ……!!)

その甘美な舌触りに、翔太は乳房を頬張るようにしてより激しくしゃぶりつく。

ちゅうっ、ちゅうっずちゅうっちゅうっ!!

「やっはあっ!! だつめ……そんな激しく吸っちゃっ……ンああっ!!」

強い吸引のたび、あるいは執拗な指先の攻撃のたびに穂花は背中をびくと弓なりに反り返らせ嬌声をあげる。その頬は湯上がりするとき以上に赤みが差し、濡れた唇はまるで煮込んだゼリーみたいなプルプルと震えていた。

「だって平気なんだろっ……こっ、この程度っ……どうせ慣れっこなんだろっ!!」

荒い息をつきそう吠えながら、指と舌とを交代する。少年は獣みたいにはぐはぐと乳房を食みながら、唾液にまみれた敏感突起を親指と人差し指でにゅるにゅると扱きたてた。

「はっうっ!! ひゃらっ、めえっ……んひゃうっ、んはああ……!!」

頭上からひつきりなしに発せられる姉の切ない喘ぎも、責め手を激しくするにつれ輪をかけて艶を増してくるのがわかる。そのことに歓喜と興奮を覚えながらも、

(でも、俺以外のヤツの前でもこんな声出したりしてきたんだろ? 下手すりゃ、もっと

エロい声っ……!!)

これまでも姉が誰かも知らない男とこういうことをしてきたのだと思うと、胸の奥からマグマみたいに悔しさがこみ上げてきて。それまでの男の記憶を彼女の身体から追い払おうとでもいうように、翔太は乱暴に穂花の胸を廻り続けた。

「もお許してっ……こんな、乳首ばっかりいっ……くぁうんっ!!」

穂花の言葉が喘ぎに変わる。翔太が乳頭をギユッとと振り上げたのだ。指の先に捉えた突起はまるでミニチュアの心臓のように、トクトクと健気に脈を打っていた。

ギユウッ! キユッ、キユウッ、ぎゅううううっ!!



年齢の足りない自分でさえ簡単に入り込めたのだ。脅迫者がどこで監視しているかわからない。

（これは全部姉ちゃんのため、なんだからな……）

そう言い聞かせ、リモコンのツマミを徐々に強めてゆく。

「やっだ……あつ、強すぎっ……くっくッッ！」

穂花が必死に声を殺す。彼女の頬がりんご色に染まっているのは暖房のせいばかりではあるまい。膝の上に置かれた掌はギュッと拳を形作り、俯いた長い髪がふるふると揺れる。長椅子越しの振動も徐々に強く大きくなり、椅子がビリビリと電気を帯びたみたいに震えた。

（この振動が今姉ちゃんのアソコを刺激してっ……!!）

淫具に責め苛まれる姉の女陰を想像した翔太は状況も忘れ鼻息荒く興奮してしまう。

「……………」

と、一席あけて横に座っていた女子が不意にチラリとこちらへ視線を向けてきた。

（なんだ？ まさかこの女が犯人——いや、にしては様子がおかしいような……?）

女生徒の動向を伺っていると、彼女はやがて反対方向を向きつつ同様の仕草を続けた。

（なんだろ？ 消しゴムでも落として……ちっ違う、振動だっ!!）

椅子は隣同士が繋がれているため、同じ列には振動が伝わるのだ。そのことに思い当たったチキンな翔太は慌ててスイッチを切る。

ヴィインッ……一拍置いて椅子の震えが収まった。隣の穂花から安堵の溜息が漏れ伝わる。

(あつ、アブねえ——ここでバレたら写真とか関係なく俺も姉ちゃんも人生終わるっての) 今更ながら自分のやっていることの綱渡り加減を自覚して、翔太はイヤな汗をかく。

それからしばしの間おとなしくしていた翔太だが、

(でも写真、まだ撮ってないんだよな)

写真がなければこれまでの(穂花の)苦勞が水の泡だ。

(あまり強くしなければ大丈夫かな……?)

悩んだ末に翔太は再びリモコンに手をかけると、一番最初にそうしたみたいにツマミを最小の目盛りに合わせた。

「ふあっ!? ……くうっんっ」

安心しきっていたところへの再襲に、穂花はしゃつくりを無理やり飲み込んだみたいいな声を漏らし身を強張らせる。

それから翔太はスイッチを入れ続けるのではなく、頃合いを見てオンオフを繰り返す。

ヴヴヴ………ヴウンッ! ……ヴヴ…………ヴィイン!!

「んっ………うあ………やつ、だあっ………!!」

いつくるかわからないビッグウェーブと執拗な微振動に翻弄される姉の、眉を八の字に寄せ瞳を潤ませる表情がひどく官能的だった。姉は刺激を堪えるように、不意打ちに備え

るように膝の上に置いた掌でギュッと拳を握っている。

「ああ……んひゃうっ♡」

時折刺激を強めてやると、ピクンと頤を跳ねさせ、口を軽く開け何か言いたげにわななかせた。きつと喘ぎ声を漏らしたのを必死に噛み殺しているに違いない。

もどかしくて仕方ないのか。姉は尿意を我慢しているみたいに内股気味に閉じた脚を擦り合わせている。

そんな彼女を見ていると、またどうしようもなく嗜虐的な欲求が胸の内側で膨らんだ。

「ほら、止めて欲しいの？ それとも続けて欲しい？」

「……………続けて、欲しいっ……………！」

真っ赤に染め上げた顔を俯かせたまま、蚊の鳴くような声で穂花が懇願してくる。

「それじゃご褒美にもうちよい強くしてやるよ」

言って翔太は手元のツマミを一段階上げる。

ヴイイイイイイ——…ツツ!!

「くううんっつ♡」

飢えきった子犬がご馳走を与えられたみたいに穂花が喜びの声をあげた。その声に一瞬ビクリとした翔太だが、幸い周囲の雑音で気づかれなかったようだ。目の前の生徒はおしやべりに夢中だし、横にいる女子はイヤホンをして音楽を聴いていた。このときばかりは不真面目な受講生一同に感謝せねばなるまい。

(危ないなあ……にしても姉ちゃん、エロすぎだろ……)

この前自室で陵辱したときも感じたことだが、相変わらず姉は感度がいい。

しかし性的興奮に昂っているのは翔太も同じ。憧れの人を公衆の面前で辱めているという背徳感に自然と呼吸が荒くなる。

もつと姉を苛めてみたい——そんな欲に駆られた翔太は彼女の反応を見つつ強弱をつけてゆく。

「ああ……だ、だめ、翔ちゃんちよつとだけ休憩つ……」

懇願する姉、しかし翔太は彼女の声が聞こえないフリをして振動をさらに強くする。

カタカタカタカタ……長椅子がまた振動で震えだした。どうしようかと翔太が思う間もなく、穂花がおもむろにぎゅうつと両足をきつく閉じ、振動を封じ込める。

おそらくは周囲の生徒らに、自分に仕込まれた淫具の存在を感じづかれなためだろう。しかしそれは取りも直さず激しく振動するローターを思いつきり股座に押し込む形だ。

「~~~~~!!」

顔を俯かせた穂花は下唇を強く噛み締め襲い来る快感に耐え忍んでいた。

(さすがにこれ以上はまじいよなあ……写真を撮つてもう終わりにするか)

そう考えた翔太はリモコンをオフにすべくバッグの中に手を突っ込む。

しかしその瞬間、図らずも触れた指先でツマミを弄ってしまった。

ギユイイイイツツ!!

隣の穂花のスカートの中で、けたたましいモーター音が唸りをあげる。

「♥♥♥♥♥!!」

瞬間、猫背になっていた姉の背中がピンツと伸びた。「あ」の形で開かれた口から言葉にならない吐息の塊が漏れる。それでもどうにか声を漏らすまいと必死に膝に爪を立てて穂花は耐え忍ぶ。

(やばいっ早くリモコンを——!!)

しかし姉が見せたそのあまりにも扇情的な牝の貌かおに翔太の目は一瞬釘づけとなり、リモコンを操作するのが数秒遅れる。

そしてその数秒は、淫具が姉の理性を蕩けさせるには充分すぎる時間だった。

「んきやああああつつつ♥」

激しすぎる快感にとうとう姉は敗北し、甲高い悲鳴が教室の静寂をつんざいた。

「どうしたっ！」

驚いた教授が声をあげ、周囲の生徒も一斉にこちらを向く。

「あつ…いやつ…ごつ、ゴキブリ…そう、ゴキブリが彼女の肩に止まってっ……………!!」
声をあげることもできない穂花に代わり、翔太はとっさに口から出まかせ。

(くっ、苦しいか——!!)

翔太は固唾を呑んで、リアクションを待っていると——。

「マジかよキメェ！」

「ヤダあ、どこ逃げたのそれえっ!!」

「静かに!!」

翔太のとっさの判断は吉と出たようだ。生徒らは蜘蛛の子を散らしたような大騒ぎ、教授がしきりに静粛を促すも、騒ぎは収まらない。講義時間も残り五分ということもあり、結局そこで解散となった。

ガヤガヤと騒ぎながら出てゆく生徒ら、残されたのは隅に座る穂花と翔太の二人だけだ。「っ……ふうっ……んうくっ……!!」

穂花はテーブルに突っ伏したまま水揚げされた魚みたいにピクピクと背中をひくつかせている。快感のために口元を結びきれないのだろう、声を殺しきれずに低い呻きが漏れ伝わってきた。

「帰るよ、姉ちゃん?」

シンと静まり返った講義室内ではその喘ぎも響いて聞こえる。翔太は姉の背中をさすりつつ退室を促した。

「んっ……う、ん……」

少年の言葉に応えるも、姉は机に突っ伏す姿勢を変えない。

仕方なく翔太が肩を貸すべくその腕を引っ張ると、穂花は糸の切れたマリオネットみたいにぐにやりと身体を弛緩させ椅子から滑り落ちてしまう。

「一旦どこかで休もうか……?」

しかし勝手のわからないキャンパスではどこに誘導すればいいのかわからない。

「隣の五号館っ……あんまり人こないし、講義室もあけっぱなしだからそこに……」

姉の指示を受け彼女に肩を貸しつつ隣の建物へ。何事かと目を向けてくる人もいたが、運良く姉の知り合いには遭遇しなかったようで声をかけられまではしなかった。

たどり着いた五号館は先ほどの建物より古臭く、なるほど人影も見当たらない。

手近な講義室のドアを開けると、翔太はいの一番でその椅子に穂花を寝かす。

「ありがとう、翔ちゃん……」

疲弊した様子の穂花が小さく笑顔を見せる。その頬は絶頂の余韻を残すように赤らんでいた。

(礼なんか言うなよ……)

脅されてのこととはいえ、彼女をこんな目にあわせているのは他ならぬ自分なのに——
姉の笑顔に翔太はいたたまれない気持ちになる。

そして同時に、大事なことを思い出した。

(やばっ、俺まだ写真撮ってないじゃんっ!?)

授業中は姉の反応に思わずそのことを失念していたが……写真を撮らなければ元も子もない。

(ここも大学の中だもん……ここなら人目も気にならないし)

とはいえいつ誰がくるとも限らない。翔太は意を決して脅迫者の顔になって穂花のスカ

トを捲り上げる。

「あつ…や、やだよお……」

穂花が手を伸ばしてそれを阻止しようとするが、その抵抗は弱々しい。

「写真撮るだけだからおとなしくしてろよ」

やんわりと彼女の手をどけ、スカートをさらにたくし上げる。

「うわつ…姉ちゃん、すごいぐしよぐしよになつてるな」

晒し物になつた穂花のショーツを目にした翔太が驚きの声をあげる。

「やだよあつ…そんな言わないでえつ……！」

改めて指摘された穂花はふるふると震えながら身を縮こまらせる。桜色の布地は彼女の漏らした愛液にビッシヨリと濡れて、まるでお漏らしでもしたのかと見まごうほどだ。

それに水気を吸つたせいで朝見たときと同じものとは思えないほど透けていた。元が薄いピンクだったせいもあり、股布は内側に隠す黒々とした茂みから、股間に仕込まれたローターまではつきりと浮き出させていた。

（うわつ、姉ちゃんエロすぎつ…でもこれってこの前のヤツより過激になるか？）

脅迫メールの指示では「前回より過激な写真を撮ること」というのが条件だった。この前送つたのはザーメンまみれの尻を出して横たわる姉の写真。あれより過激かというと少し自信がない。

（やっぱり下着も取つた方が……）

それを写真に収め、誰とも知らぬ相手に差し出すのは嫌だ。しかし背に腹はかえられない。少なくともそうすればこの前より明らかに過激な写真になるのは確かなのだから。

それに——翔太自身、穂花のそこが今どうなっているのか見てみたいという気持ちもあった。

(そうだよ、いくつか撮ってできるだけマイルドなヤツを送ればいいんだから)

「姉ちゃん、パンツ脱がすぞ」

言って少年は姉の下着のゴムに手をかける。

「そんなっ……恥ずかしい、よおっ……!!」

嫌がる言葉を紡ぐ彼女。てつきり抵抗されると思っていたが、ぐいっと下着を脱がしにかかると姉もお尻を持ち上げてそれを手伝ってくれた。

(本当にわかんないな、女のひとつ……)

そんなことを思いながら下着を剥ぐと、ぬちゃあつ……女陰と股布との間でまるで糊づけして生乾きのうちに引き剥がしたみたいな粘音がした。掴んだショーツはただの布とは思えないほどずっしりと重い。穂花の股座を外気に晒した瞬間、ムンツと部屋の空気の密度が変わるくらい濃厚な、煮つめた花のような匂いがした。

(姉ちゃんのアソコっ、すぐくいやらしい匂いさせて……!!)

発情した牝のニオイ、としか呼びようのないそれを嗅いだそばから、翔太の股間はピクンッ! と鯉みたいに飛び跳ねて否応なく勃起させられる。

そして目の前の秘所である。

(うわあ：姉ちゃんのアソコっ…まつ、ま〇こっ…すっ、すごく綺麗だっ…!!)

生で女性器を目にするのは初めてのことだったが、無修正画像や動画などは何度も目にしたことがある。しかしそれらに写されていたくすんだ陰部と目の前の穂花のそこはまるで別物だ。

ローターによって執拗なまでにほぐされたそこは軽く赤みがさして全体が桃色に色づいており、左右が完全にシンメトリーな陰唇は鉛細工みたいに綺麗な造りで。いちごミルク色の肉花弁は外側へと咲き綻び、内側の鮮やかなサーモンピンクの膣口まではつきりと曝け出していた。

(もっと、もっと奥まで見たい、姉ちゃんのみ〇こ——!!)

「姉ちゃん…自分でそこ、広げてみせろよ」

秘部への好奇心に駆られた翔太が姉に命令する。

「そんなっ…恥ずかしいっ」

「そこまでしといて今更恥ずかしいも何もないだろ。それとも写真を——」

翔太の脅しに穂花はおずおずながら自分の太腿を抱えるようにして股間に手を伸ばす。そうして陰唇の左右の肉土手に指を添え——。

くばあっ♥

柔肉を押し込むようにして無理やり姫百合を咲き綻ばせた。

剥き身となった膣前庭では呼吸に合わせてひゅくひゅくと収縮を繰り返す膣口はもちろんのこと、その上に息づく針穴のような尿道までがはつきりと見て取れた。

さらにそのわずか上方では、ローターの執拗な責めに苛まれてぷっくり充血した陰核がびよこんと顔を覗かせている。包皮はひとりで剥けてしまったのか、紅色の肉真珠がまるでミニチュアのペニスみたいにピンピンにいきり立っていた。

割れ目を開いた反動で内側に溜まっていた潤沢な蜜液が吹きこぼれ、会陰を伝い桜色の肛門を舐めるように濡らす。愛液にまみれた美肛はさながらニスを塗ったみたいに艶めいて、とても排泄器官とは思えない美しさを湛えていた。

（すごい、すごいっ……姉ちゃん、俺の目の前で姉ちゃんがま〇こ開いてっ……!!）
姉の艶姿にペニスがズキズキと疼いて止まらない。この目の前でヒクつく肉穴に突っ込んだらきつと——発情した牝を前に、少年の理性が獣欲によって支配されかけたとき。

「……写真、撮るんじゃないの？」

恥ずかしい格好で待たされている穂花の言葉に、翔太はハッと我に返る。

（そっ、そうだよ俺は姉ちゃんのために写真を……何しようとしてんだ俺の馬鹿っ!!）
「も、もちろん……そのまま動くなよ」

大慌てで何度もシャッターを切る。全身、下半身のみ、局部の拡大写真……翔太は夢中でシャッターを切りまくる。

「そろそろいい？ お尻上げてるの、辛くなってきたよお」



しかも彼女ときたら寧丸をマッサージしつつ、さらにとんでもない部分にまでその責め手を伸ばしてきた。

ぬるっ……にゆるりっ。

「はあうう!!」

翔太が喉の詰まったような声をあげたまま背を反り返らせる。陰囊を包む指先が蟻の門渡りをヌルリと滑ってその先の尻谷間にまで潜り込んできたのだ。

「そっ、そんなとこ触るなよっ……汚いだろっ!!」

慌てて腰を上げようとするものの、

ぬりぬりぬりぬりゆうう……!!

「ひんあうん♥」

姉のイタズラな指がまたも尻溝を擦り、少年は一気に腰砕けにされてしまう。

「お風呂なんだから汚いところを綺麗にするのは当たり前だよお?」

尾てい骨から玉袋の根元あたりまで、尻割れの間で歯ブラシみたいに指を前後させながら穂花が笑う。

「そりやそうだけどっ……そのっ、くすぐったいからっ……!!」

「知ってるよ? わたしだって翔ちゃんによくされてるもんね?」

少年の懇願にも穂花はそう言ってイタズラをやめない。指は次第に少年の放射線をなぞるように、小さな円を描くみたいにクリクリと肛門粘膜を刺激しだす。

「どう、くすぐりたい？ それとも気持ちよくなつてきちゃったかな？」

姉はイタズラな微笑を浮かべながら肩から顔を覗かせいやらしい視線を絡ませてくる。

「や、やめ…もう降参っ…こうさんだつちゅーのっ!!」

このままでは指を挿入れられてしまうのでは——淫婦のような姉のテンションにそんな予感を抱いた翔太は、とうとう彼女に泣きを入れる。

「そうなのー？ じゃあ、一回キレイキレイしよつか」

そうして椅子から立たされシャワーを浴びせられた翔太だったが、その間じゅうも穂花は絶えず身体を密着させ乳首や脇腹、そして睾丸への愛撫をやめようとはしない。

にもかかわらず、やっぱり穂花は肝心の勃起にだけは触れてこなかった。

（なっ、なんで触ってくれないんだよおっ…!!）

向こうからしてくれないのならと、どうにか彼女の温もりを感じたくて翔太の方から腰を突き出してみるものの、

「だめだよ翔ちゃん？ もう少し我慢しなくっちゃ」

まるで注射にぐずる子供をあやすナースのような口調でそう言いながら、姉は巧みに勃起から逃げてはぐらかし、あくまでおあずけを食らわせる。

「マットでうんと気持ちよくしてあげるから、お風呂で待っててねー？」

そうして姉がマットプレイの準備をしている間、翔太は一人浴槽で待たされていたのだが……。

(したいっ…姉ちゃんにチンコ扱いて欲しいっ…フェラでもいいし……てゆーか早く射精したいいいっ!!)

少年の頭の中はこれから行う姉とのセックスのことでいっぱい。一秒が一分にも十分にも感じられるほど待ち遠しくてたまらない。

しかも彼女ときたら、マットを敷く際にわざとこちらに裸の尻を突き出してみせたり明らかにこちらを挑発してくるのだ。クンツと突き上げられた美尻の間から覗く桃色の秘唇を見せつけられたときには、翔太も思わず浴槽中で空腰を使ってしまったほどだ。

股間は今や破裂寸前。それでも自分の手で慰めようとしなかったのは、やっぱり同じ射精するのなら彼女の膣内に射精したかったからだ。

(したいしたいしたいしたいしたいしたいっっっ——!!)

湯船の温度も相まって頭の中が茹だつたみたいにくらくらしてきた。こうなったら姉に泣きついてでもエッチをさせてもらおうか——翔太が浴槽から腰を浮かしかけた刹那。

「さあ翔ちゃん…じゃなくって翔太さん。準備できましたからこちらにどうぞ」
ちようど準備が整ったらしく、姉泡姫がマットの上で少年を手招いてきた。

「姉ちゃんっ！」

辛抱たまらん、とばかりに姉のカラダに貪りつこうと湯船を飛び出そうとしたものの、
「あっ、ローションで滑るから危ないよ？ わたしの手握って？」

姉はそれを制するように注意を喚起しつつ、こちらに向けて手を差し伸べてきた。

「えっ、うん……」

一刻も早く姉の温もりを感じたいところだが、確かにツルツル滑って危なそうだ。翔太は素直に姉の手を借りようと腕を伸ばし、ゆっくりとマットの上まで誘導される。

しかしそこで翔太は何故かうつ伏せに寝かされてしまった。これでは挿入しようがない。
(あれ、姉ちゃんまだ挿入れさせてくれないのかよっ……)

一刻も早く射精したい少年がもどかしさのあまりマットに股間を擦りつけていると。

「それじゃ気を取り直して、いっぱい気持ちよくしてあげるね？」

天井を向けた背中に熱したプリンのような感触。今までも何度となく触れてきた姉の身体だが、こうやってローションを纏った状態ではまるで別物。まるで全身が粘膜になっているようだった。

「すごいっ……身体中ヌルヌルで、すごく敏感になっちゃうよおっ♥」

翔太の上に身を重ねた姉が肢体をひくつかせながら切ない声を漏らす。しかしローションのぬめりに翻弄されていたのは穂花だけではない。

(なんだこの感触っ……身体中めちやくちや敏感にされてるみたいなの……!?)

まるで全身の薄皮を丁寧剥かれたみたいに、身体中の感度が何倍にも増して感じられる。自分の吐息が肩に触れただけでピクンと身を跳ねさせ、振らせてしまうのだ。

お互いローション体験に慣れないうちに、姉がプレイを開始した。うつ伏せの少年を跨ぐ姿勢で身体をヌルヌルと上下に滑らせ乳房を背中に擦りつけつつ、ぼってりとした唇で

タコみたいにちゅうちゅうと背中に吸い付いてくる。

「っあ……背中っ、舐められるのって、こんな気持ちよかつたんだっ……!!」

普段自分でも触れる機会の少ない場所だからか、そこを舐められると背骨がソフトキャンディーにでもされたように弛緩してしまう。

「ふふ、気持ちいいですかあ？」

姉はおままごとちつくに問いかけながら、その手を少年の胸板とマットの間にぬりゆりと潜り込ませる。

「ひゅんっ!!」

ローションを塗布された上での乳首責めは先ほど感じたより数段刺激的だった。瞬くような快感が左右の胸に灯り、乳頭が一瞬でガチガチに勃起させられてしまう。

「翔太さんの乳首もおピンピン♥ おちんちんとどっちが硬いかなあ？」

問われた少年は次に当然彼女の手が股間に伸びてくるものと疑わず息を止めたが、姉ははぐらかすように翔太の上半身に責め手を集中させ続けた。

翔太も気を取り直し、姉泡姫のこそばゆくも心地よい全身マッサージに身を委ねることにした。

「それじゃ翔ちゃん、うつ伏せのままお尻持ち上げて？」

ほとんど催眠状態にも似た思考停止に陥っていた少年は言われるまま腰を浮かせる。足場が不安定なためこの姿勢を長くは維持できない——早くも膝がガクガクいい出した

翔太がそう伝えようとしたそばから姉がこちらの足の間に正座の格好で膝を入れてきた。そのまま腰を抱えられ、翔太は自重を支える必要がなくなったものの。

「わあっ♥ 翔太さんのお尻の穴、ピンク色してる〜！ かわいいっ♥」

姉があげた黄色い声に、少年はビクンと腰を跳ねさせる。

「かつ、かわいって言うなよおっ!!」

（ねっ、姉ちゃんの目の前に俺のケツが……はっ、恥ずかしいっ……!!）

肛門ばかりか、今の体勢なら陰囊も陰茎もその裏側すべてが丸見えだろう。屈辱的な仕打ちに少年は思わず両腕で顔を隠した。

「あれえ……翔太さんのタマタマ、さつきまでと違ってだら〜んとしてるよ!? ねえねえ、なんで〜?」

「いや、風呂入ったから……熱いと伸びんだよっ!」

好奇心いっぱい質問に、翔太は恥ずかしさのあまりぶつきらぼうに言い返す。

「そうなんだあ……それじゃどれくらい伸び伸びになっっちゃうのか、う〜んとあつためてみよっかあ♥」

興味津々、といった風な穂花の声。イヤな予感がした。

「えっ!? あっ、あつためる、つていつたいどこで——」

「あ〜んっ……はあむっ♥」

返事の代わりに返ってきたのは燃えるような熱さとぬめる粘膜の、柔らかな感触だった。

「うああああっ!!」

瞬間、腰が飛び跳ねる。穂花が翔太の陰囊を二ついっぺんに丸呑みしたのだ。舌の上でモゴモゴと転がされ、だらしなく伸びきった袋の皺を裏側からねつとりと舐め上げられる。興奮に荒くなっている姉の鼻息がちようど菊座に当たるものだから、そのたび少年はまた女の子みたいな声で鳴かされてしまう。

姉はさらに片方の玉ずつちゅむちゅぶと吸い付き、吸引力だけで持ち上げてくる。その激しい喜悦はまるで袋の皮越しに直接ザーメンを吸り取られているかのようだった。

(玉あつ……きつ、気持ちいいけどこればつかされてたら頭おかしくなるうつ……!!)

たまらなく気持ちいいが、やはり射精を伴わないためどうしようもなくもどかしい。

「もお許しつ、本当に限界だからっ……俺っ、早く姉ちゃんとしたいんだよおっ!!」

情けなく泣きついた翔太に、穂花もようやくしゃぶりついていた玉袋からちゅぽんと唇を離した。

「ごめんごめん翔ちゃん、そんな顔しないでー。今度こそちゃんと挿入れてあげるから——それじゃ仰向けになって?」

あやすような口調と共に、姉が臀部に頬ずりしてくる。普段はよしとしない子供扱いだが、やっと挿入できる——切羽詰まった翔太は姉に命じられるまま、すぐさまゴロンと仰向けになる。ローションマットの上ではそれだけでも大変なアクションだったが、早くやりたい少年はなんとか自力で身を反転させた。

上を向いても勃起は重力に反発するように天井を向き、ビクッビクッと脈打っていた。

「わっ、翔ちゃんの元気いっぱいっ♥——それじゃ翔ちゃんのこと犯しちゃうよ？」

穂花は嬉々として少年の腰を跨ぐと、和式便器に跨がるようにゆつくりと腰を降ろす。彼女の股座はローションのためか既にぐちよぐちよに濡れそぼち、水を吸った茂みは海苔みたいに恥丘にへばりついて。サーモンピンクの割れ目が陰核を包む包皮部分から会陰へと至る末端までくつきりと見てとれた。

クレヴァスは先ほどの指戯のせいか既に綻んでおり、内側の肉壁まで丸見えだ。蜜を滲える肉百合の向かう先には当然、鋼鉄の硬さで天を突く翔太の肉刀が待ち構えており——。

ずぶつ……ぬるにゆるぐぶふううう——……!!

「ふああああ——……♥」

天から舞い降りた肉食の淫華は、そびえる怒張を一気に根元まで飲み込んだ。

「くうっん……!!」

ようやく訪れた結合の時に、少年の口から深いため息が漏れる。

「あつ……も、もしかしてわたし重いかな!？」

恋人になつてから前の穴でも後ろの穴でも何度となく交わった二人だが、思えば騎乗位はこれが初めてだ。少年の呻きの意味を取り違えたらしい姉が心配そうに尋ねてきた。

「ぜっ、全然っ！ 見た目ムチムチしてる割には姉ちゃん、すごく軽いよ」

「あゝ、それって一言余計だよお？」

少年の返事にぷうっと頬を膨らませる穂花。

「ふふっ……でもこのかつこ、ホントに翔ちゃんのこと襲ってるみたいで恥ずかしいな」
少年の上に乗った姉はそう漏らすものの、その腰を早くもくいつくいつと前後に動かし始めていた。

「うあっ……姉ちゃん言ってることとやってることが……つか腰っ、すごくエロい動き方してるっ……!!」

互いの茂みを絡みつかせるようなその動きはまるで捕食されたペニスを小刻みに振動させているかのよう。肉根を揺さぶる激しい喜びに翔太は全身をぶるつと震わせた。

それでも、先ほどまで受けた焦らし責めから間を置いたおかげで射精への切迫感は弱まっており少し余裕が出てきた。

見上げる乳釣鐘はなんだかいつも以上に新鮮で、プルプルと揺れる瑞々しい果実のような乳房はなんともエロティックだ。先端部は既に硬く尖って朱に色づいていた。それはあたかも少年を誘っているみたいで、翔太は自然と手を伸ばす。

「やあんっ♥ 翔ちゃんってば本当におっぱい好きなんだからあ♥」

むにゆうっ、にゆるりゆっ……ローションにまみれた乳球はしかし簡単には捕まえられず、鷲掴みにしたと思っただけからにゆるんと掌を滑り落ちてしまう。奮闘の末乳揉みを諦めた翔太は、代わりにその桜色の先端を指先でにゆるにゆると摩擦してやる。

「あっはあっ……ダメっ、乳首感じすぎちゃう♥」

ダメ、と言いながら恋人はもつともつとせがむように上体を倒し胸を少年の顔に押し付けてきた。

「んぷっ!! ……しようがないな姉ちゃんはっ♥」

翔太は悪態をつきつつも押し付けられた雪色果実に大喜びでむしゃぶりついた。

ちゅうつ、ちゅうつちゅうつ……ちゅうつちゅうつ!!

「ふああああ……おっぱい、すごく感じちやうよおおっ……!!」

ますます胸を押し付けてきた穂花は、全体重を預けるように激しく腰を上下に振りたてる。

ぐちゅつ、ぐちゅるっ……ずぶううう!!

激しい抜き差しに破廉恥な音が浴室中に響き渡った。

(気持ちいいっ……このまま、このまま姉ちゃんの膣なか内なかに——!!)

「あああ……姉ちゃんっ!!」

再びこみ上げてきた射精の欲望に、堪らず下からも肉壺を突き上げようとした翔太だが。

「んっ……ふふ、ダメだよ翔ちゃん？」

叱咤の声と共にぬりゅつ……とペニスを包む熱い感触が消え去った。姉が腰を上げ少年の勃起を吐き出してしまったのだ。

「んああうっ……なっ、なんでっ……っ!!」

燃え盛るような膣内にあつた反動で激しい気化に襲われた翔太は、思わず自らの股間を

押さえて姉を見上げる。するとそこにはこちらを見下ろす穂花の顔があった。

「お客様翔ちゃん今日は自分で腰動かしちゃだめ♥ わたしにされるままになつてればいいの。ね？」

斜め下から見る姉はゾツとするほど妖艶で。こちらの反論を許さない雰囲気があった。

「うっ、うん……」

何のこだわりかわからないが……仕方なく同意した少年の返事に満足したらしい穂花は、くると身を翻らせると、今度はこちらに背中を向ける格好で再び腰を降ろし勃起を啜え込んだ。

「うあああ……姉ちゃんの中っ、熱いつ……よっ!!」

根元まで覆う極上の肉の締め付けに、少年が顔を仰げ反らせた。ぐちゅっ、ずぶっ、ぬぐぶっ……この体勢は先ほどより動きやすいのか、それとも単に騎乗位に慣れたからか。穂花は腰を大胆にグラインドさせて少年の勃起を扱きたててくる。

自ら動きたい衝動に駆られるものの、姉に禁止されているため翔太は全身を強張らせて耐え忍ぶ。肉悦の中で耐えるものが絶頂以外にあるなんて翔太は初めて知った。

「どうしたの翔ちゃん。こんなに身体カチカチにして……もしかして腰、振りたくなくなっちゃった？」

馬乗りの姉が背中越しに優しい声で問いかけてくる。そちらに視線を向けると、自分の腹の上での字を描く巨桃が視界いっぱい迫ってきた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



ヴァルキリー



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!